

教育臨床・特別支援教育プロジェクト報告

—心理・教育臨床活動のまとめ（平成17年2月～平成18年1月）—

加藤義男*

(2006年2月6日受理)

I. スタッフ

平成17年度研究員は、専任の加藤義男（附属教育実践総合センター）のほかに、教育臨床プロジェクト我妻則明（障害児教育講座）、特別支援教育プロジェクト宮崎眞（障害児教育講座）、名古屋恒彦（障害児教育講座）の3名である。外部からの研究協力者として臨床心理士、教員、大学院生等23名（教育臨床プロジェクト13名、特別支援教育プロジェクト10名）を委嘱した。

また、地域連携事業にかかる非常勤職員（心理相談員）として、阿部幸成（元養護学校講師）を委嘱した。

II. 相談・支援活動

附属教育実践総合センター「心理・教育相談室」における相談・支援活動について報告する。個別相談、コンサルテーションは加藤が中心となって、心理相談員の協力も得て実施したものであり、グループ支援活動や相談会等は加藤が責任者となって、研究協力者、心理相談員の協力を得て実施したものである。

(1) 個別相談

平成17年2月から平成18年1月までの個別相談の来談者は93人であり、その内訳は次のとおりである。①以前からの継続が45人（48%）、平成17年度新規が48人（52%）であった。②年齢は4歳

から37歳。内訳は、幼児16人（17%）、小学生43人（46%）、中学生21人（23%）、高校生5人（5%）、18歳以上8人（9%）であった。③主となる問題の内訳は、「不登校」17人（18%）、「ADHD及びその疑い」11人（12%）、「自閉症・アスペルガー症候群及びその疑い」30人（32%）、「LD及びその疑い」12人（13%）、「発達の遅れ・境界」14人（15%）、「かん黙」3人（3%）、「対人不安等」6人（7%）であった。

月ごとの相談者実数及び相談延べ実施回数を表1. に示した。来談者93人に対して、延べ207回の相談を実施した。一回の相談時間は1時間～1時間半程度であり、行動観察、心理テストの実施、プレイセラピー、母親面接、カウンセリング等を行った。

(2) コンサルテーション

14校園（幼稚園・保育園9、小学校3、中学校2）に出向いて、事例検討中心のコンサルテーションを実施した。さらに、教育学部内相談室において、教員等との事例検討のコンサルテーションを11回実施した（幼稚園教員3、小学校教員4、中学校教員2、その他2）。

(3) 不登校児への支援活動（「みんなでチャレンジ」の取り組み）

不登校児支援の会「みんなでチャレンジ」において、不登校児（別室登校含む）及びかん黙児への支援活動を実施した。対象児は9人（高校1年

*岩手大学教育学部附属教育実践総合センター

表1 個別相談の実施状況 (2005. 2～2006. 1)

月	月ごとの相談者実数	相談延べ実施回数
2月	12人 (5人)	15回
3月	15人 (2人)	18回
4月	18人 (7人)	19回
5月	10人 (2人)	12回
6月	20人 (3人)	23回
7月	17人 (4人)	17回
8月	16人 (2人)	17回
9月	16人 (6人)	19回
10月	15人 (2人)	17回
11月	15人 (7人)	17回
12月	13人 (5人)	19回
1月	12人 (3人)	14回
計	179人 (48人)	207回

※ () 内はその内の新規相談者の数を示す。

※ 相談者実数の中に、電話相談10件を含む。

1人、中学3年3人、中学2年2人、中学1年3人。男3人、女3人。不登校7人、かん黙2人)。支援スタッフは10人(教育学部大学院生4人、教育学部生4人、心理相談員1人、及び加藤)である。

活動状況は次のとおりである。

- ① グループ活動…9回(月1回、土曜日)実施し、延べ参加児は29人であった。内容は、スケート、子ども科学館参観、県立博物館参観、ボーリング、運動、ゲーム大会等である。
- ② 個別支援…平日の午後、相談室において心理相談員との一対一の支援を実施した。支援の内容は、学習面・心理面のサポートであり、中学3年生の1人が週一回程度来所した。

(4) 「LD等相談会」の取り組み

「LD等相談会」(土曜日午後実施)を3回実施した。スタッフは臨床心理士、作業療法士、養護学校教員の8人(附属教育実践総合センター研究協力者)及び加藤である。

来談児童は6人。その内訳は、幼稚園1人、小学生4人、中学生1人で、いずれも男子。問題別にみると、LDの疑い2人、ADHDの疑い2人、

高機能広汎性発達障害の疑い2人である。

(5) ADHDまたはその疑いを持つ児童への支援活動(「わっこの会」の取り組み)

「わっこの会」(「いわてADHDを考える会」の通称、加藤は世話人)として次の活動を行った。

- ① 親の集い…6回実施した。参加者延べ総数は39人で、親同士の意見交換やグループカウンセリングを行った。内1回は、盛岡市内私立高校長の講話を聞く機会をもった。
- ② 親と子の集い…花見会(4月実施、参加7家族)、クリスマス会(12月実施、参加5家族)を実施した。両者とも、岩手大学学生の協力を得た。
- ③ 講演会…6月に、千谷史子先生(ADHD研究会代表)を招いての講演会(「軽度発達障害児・者への支援」)を実施した。参加者は97人。

(6) 高機能広汎性発達障害児の支援活動(「エブリの会」の取り組み)

「エブリの会」(「いわて高機能広汎性発達障害児・者を考える会」の通称、加藤は世話人)として次の活動を行った。

- ① エブリ教室…毎月一回、土曜日に7回実施した。参加児童は8人（すべて小学生男子）で延べ参加総数は41人である。スタッフは10人（教育学部大学院生、養護学校教員等でいずれも附属教育実践総合センター研究協力者）。
- ② エブリ談話室…中学生以上の高機能広汎性発達障害者をもつ親の話し合いの場として実施した。毎月一回、平日の午前中に9回実施した。参加者は8人、延べ参加総数は33人であった。8人の保護者の子どもの内訳は、中学生5人、高校生2人、成人1人で男性6人、女性2人である。
- ③ エブリ親の集い…幼児及び小学生の高機能広汎性発達障害児を持つ親の話し合いの場として今年度より実施した。毎月一回、平日の午前中に7回実施した。参加者は11人、延べ参加総数は41人であった。11人の保護者の子どもの内訳は、幼稚園2人、小学生9人で、男子9人、女子2人である。
- ④ エブリクラブ…「エブリ教室」修了生の集まりとして4回実施し、延べ参加者総数31人。

III. 教育学部地域連携事業としての取り組み

教育学部地域連携事業「学校不応児への教育的支援事業」について、本プロジェクトが中心となって取り組んだ。取り組みの主な内容は、次のとおりである。

- (1) 心理相談スタッフとして、1名の非常勤職員（心理相談員）を依頼した。
- (2) 事業
加藤及び研究員、心理相談員が中心となって以下の事業に取り組んだ。
 - ① 個別相談…「心理・教育相談室」における相談・支援活動（Ⅱ. 参照）
 - ② 市町村教育委員会との共同事業による研修事業・矢巾町・紫波町教育委員会共同事業による特別支援教育研修会（8月、参加教員18人）

- ・久慈市教育委員会との共同事業による学習障害児等相談会（8月、相談者7人）
- ・北上市教育委員会との共同事業による特別支援教育研修会（6月及び1月、参加教員約95人）

IV. 研修活動

- (1) シンポジウム「こころの傷をうけやすい子どもたち：その理解と支援」
日時：平成17年2月19日
対象：教員、学生、一般市民 参加者80人
 - (2) セミナー「第2回軽度発達障害セミナー」
日時：平成17年3月5日
対象：教員、心理・リハビリ関係者 参加者33人
 - (3) セミナー「特別支援教育コーディネーター研修セミナー」
日時：平成17年7月29日
対象：盲・ろう・養護学校教員、参加者20人
 - (4) セミナー「特別支援教育教え方教室授業実践セミナー in 岩手」
日時：平成17年11月5日
対象：教員 参加者250人
 - (5) 講演会「軽度発達障害児・者への支援」
講師 千谷史子（ADHD研究会代表）
日時：平成17年6月12日
対象：教員、学生、一般市民 参加者97人
 - (6) 講演会「脳と学習のかかわり」
講師 川島隆太（東北大学教授）
日時：平成17年2月5日 参加者：310人
- ### V. 外部機関との連携・協力
- (1) 行政等関連委員会の委員として参加し、地域との連携・協力を図った。加藤による主なものは、市就学指導委員会、盛岡市特別支援教育支

援チーム委員会、県ADHD児等支援事業調査研究運営会議、県障害児療育のあり方検討委員会等である。

- (2) スクールカウンセラーとして参加し、学校現場での教育相談に従事した。加藤は、公立中学校に週一回(4時間)、附属中学校に年10回(16時～18時)スクールカウンセラーとして務めた。